

リサーチ TODAY

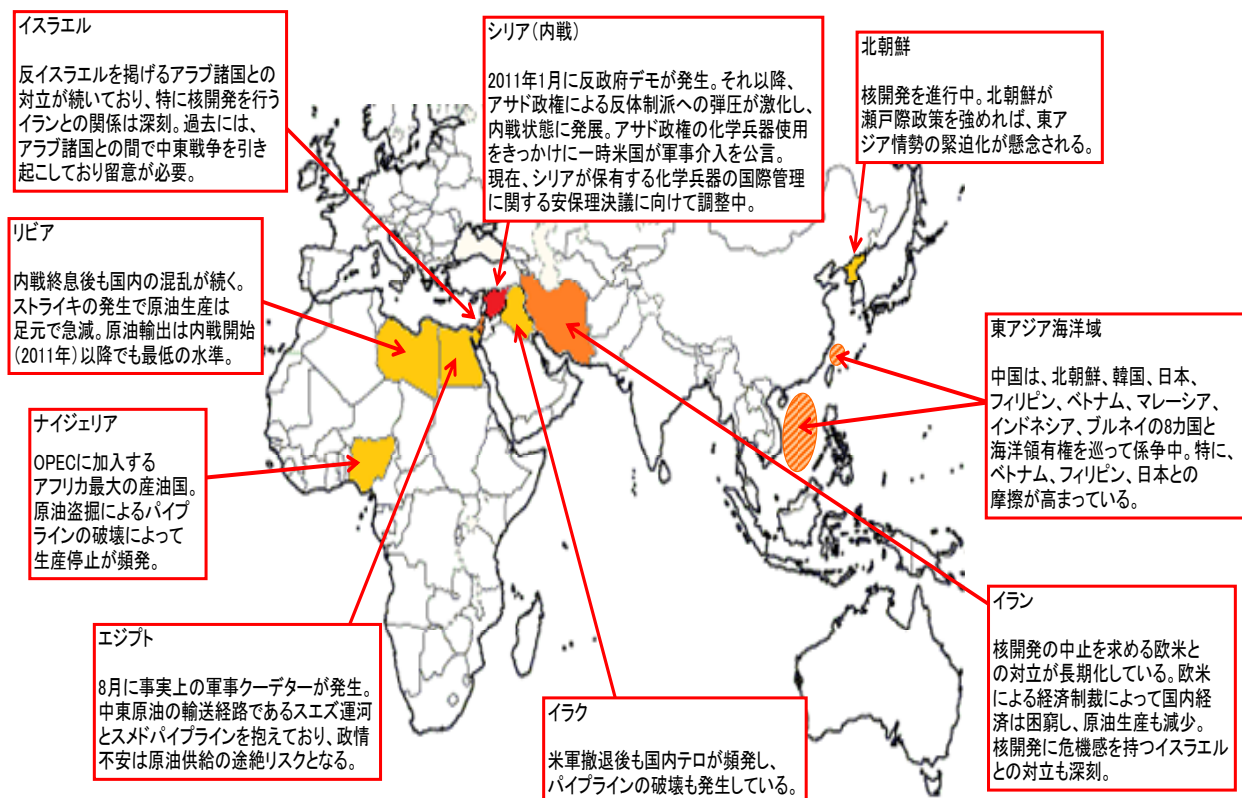
2013年10月18日

世界中、地政学リスクばかり、原油価格は高止まり

常務執行役員 チーフエコノミスト 高田 創

先月は国際的にシリア問題が大きな注目を集めたが、今日、地政学的なリスクはシリアだけではない。下記の図表は地政学的な問題をプロットしたものであるが、問題の所在は世界的なレベルに拡散している。シリアを中心とした中東・北アフリカ地域に限定してもアラブの春以降の不安定化は続いている。第二次大戦後、米国・ソ連の2大強国による冷戦下による世界への覇権が大きく転換した。ソ連崩壊で出来たロシアの影響力の低下、米国のもつ影響力の低下と、中国という新たな覇権国家の台頭のなか、地域での紛争が増加する状況にあり、こうした構造は2010年代の特徴と考えていいだろう。

■ 図表: 主な地政学的問題

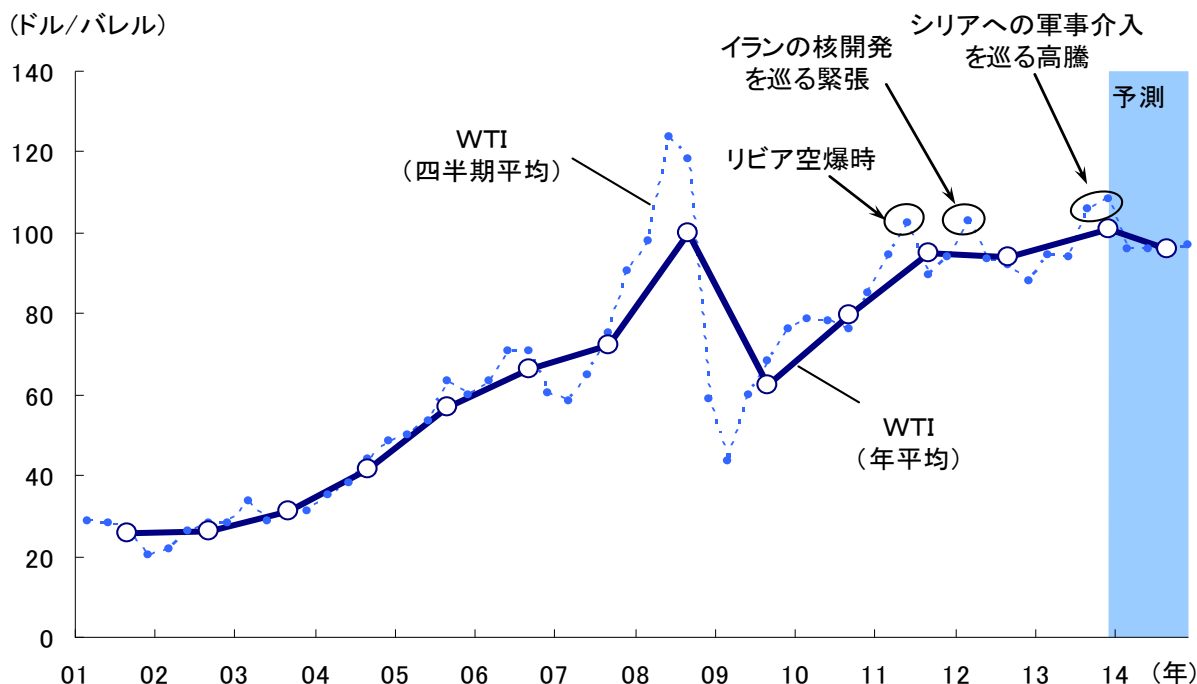


(資料) 各種報道等よりみずほ総合研究所作成

リスク管理の世界では、今日、「テールリスク」と呼ばれる事象が重視される。それは、起こる可能性は低いものの、万が一発生した場合にはその影響が大きいリスクを指す。本論における地政学的リスクはまさにその好例であろう。紛争という「万が一」のケースが生じた場合、金融市場では何が起き、世界経済にどのような影響があるのか、これは非常に重要な問いである。

な影響が生じるかについては、「ストレス・テスト」とされる思考実験が必要になる。みずほ総合研究所は先月、原油に関するレポートを発表し¹、シリアを中心とした中東情勢の変化に伴う原油価格への影響分析を行っている。同レポートによる原油価格の予想結果は下記の通りだが、2010年代は過去の地政学的影響を受けて、一時的に原油価格が跳ね上がる動きが繰り返された。

■ 図表：原油価格推移と予想



(注) 予測は、みずほ総合研究所

(資料) Bloomberg

今後の原油市場の需給環境を展望すれば、シェール革命に伴い米国の供給量が拡大する一方で、世界的な需要が2000年代半ばまでの経済活況時にみられたペースには戻らないことから、需給全体では下押し圧力が生じる。ただし、本論にも示した2010年代以降の地政学的な変動要因の高まり、なかでも中東・北アフリカという、依然として原油の産出の大半を占める地域での不安が拡大する状況が続いている。各国の民主化運動は、独裁や、イスラム主義、君主制といった権威主義と対立するだけでなく、それらの権威主義の間にあったこれまでの対立を助長し、なおかつテロを含む地域の不安定さも誘発しやすい構造を生み出している。しかも、昨今、米国のオバマ政権の求心力が益々低下しているだけに、地域紛争の安定化が容易でなくなっている点も非常に気掛かりだ。従って、中期的にはこのような緩和的な原油需給環境のもとではあるものの、地政学的なリスクに伴うリスクプレミアムが加わることで、原油価格については90ドル台を大きく下まわらないような高値が続きやすいと考えられる。

¹ 井上淳「中東情勢を巡る原油の高騰リスク」(みずほ総合研究所『みずほインサイト』2013年9月13日)

当レポートは情報提供のみを目的として作成されたものであり、商品の勧誘を目的としたものではありません。本資料は、当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成されておりますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。また、本資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。